

知の実践のかたちとローカリティ

——「ひだびと」から——

重 信 幸 彦*

1. 学史を問うこと

「民俗学って、変ですよ、なんでそんなに学史を一所懸命にやっているんですか？」。

ある時、知り合いの日本近代文学の研究者にそう言われて、返答に窮してしまった。近代文学では、文学史や個々の作家や作品の先行研究は語るものの、いわゆる「学史」を語ることはあまりないという。

今日的な意味での「文学」概念そのものが成立していない近世以前の文学研究にはあてはまらぬが、「文学」と名付けられた対象が、既に研究以前に外在しているとみなし易い近代文学研究のような領域と、民俗学とは、確かに随分と事情が異なるように思う。研究の対象を指示する「民俗」そのものが民俗学によって構築され流布された概念に他ならないからだ。当たり前なことではあるが、民俗学以前に実体を持った「民俗」なる事柄が存在していたわけではない。

にもかかわらず、「民俗」が自明で確固たる存在であると考えてしまうなら、それは下手をすると、自らが対象を名付け意味づけた過程を忘却し、悪くいえばマッチ・ポンプの学となる危うさを抱え込む。そこで民俗学は、常に学そのものありようを問うことと抱き合わせて対象を眼差さねばならない、という宿命をかかえている。

今回、企画者の菊地暁は、この日本の民俗学史を問うにあたって、「一国民俗学ノムコウ」というキーワードを与えてくれた。「一国民俗学」は、一時期、民俗学と「日本イデオロギー」の結びつきを批判する、民俗学そのものを対象にした文化研究のターゲットでもあった。それと同時に民俗学においては、この「一国民俗学」という考え方は、日本の国内にひとつの民俗学が存在するという印象を喚起し、柳田國男の実践がローカルな学の運動を組織化し、最終的

* しげのぶ ゆきひこ 東京理科大学（非常勤）

に大学のアカデミックシステムのなかの学へと成長したという、進化論的学史の物語と抱き合わせなのではないだろうか。

菊地は、国境を越えた民俗学／者のつながりから、この「一国民俗学」という歴史観を相対化していく風穴をあけようと企てる。菊地の問いが、「一国民俗学」の歴史語りを、一国の外へ開くことで批判的に検討するのに対して、本稿では、「一国」というナショナルな枠組みの内側を掘り下げてみたい。「一国民俗学」史のなかでは、各地のローカルな実践は、柳田國男を中心とするあの進化論的学史のなかで、あくまでも民俗学に折伏され組織化されていく対象として語られる傾向がある。しかしここでは、視点を逆転させて、そのローカルな実践に焦点化し、そこから民俗学を捉え直してみたい。そして東アジアの民俗学史という問いに接合する一つの手がかりを得る予備作業として、一つの民俗学に収斂し得ない実践のありかたを見出し、「一国民俗学」史の単線的な学史語りを相対化しておきたい。

2. ローカルな実践のリテラシーの拡がり 江馬修と「ひだびと」の人々

(I) 実践のリテラシーから

単に、研究者の列伝や、そこで語られた議論の内容のみを吟味するだけでは、ローカルな文化運動の実践のなかに胚胎した初発の民俗学の場所を測定することはできないだろう。佐藤健二は、そうした運動を捕捉する学史の視点として、いかに学を実践しようとしたのか、その方法に着目した学史の可能性を指摘し、運動がどのような仕組みにより認識を生み出し、それを共有しようとしたのか、「認識の生産過程」を問う必要があるとしている〔佐藤 2009〕。概念や学説などの言説だけでなく、その実践の「かたち」を問う視点といってもいいだろう。

私はそうした問いを共有し、既に、昭和初期に北九州・小倉で活動した小倉郷土会について検討している〔重信 2009〕。同会は、小倉の耳鼻科医・曾田共助をパトロンとして、サロンのように開放されたその自宅を拠点に活動し、一九三五年から各地の郷土研究の運動をオルグし始めた柳田國男と民間伝承の会とも深い関わりを持つようになった。この小倉郷土会を柳田國男の側から見ると、あたかも民俗学の九州支店の一つになったように見えるかもしれない。しかし、そのローカルな運動のありようを見ると、小倉郷土会の同人達にとって民俗学は、文学（短詩型文学、小説、童話）、文献史学、考古学などとともに、あくまでも実践の選択使の一つに過ぎないことが見えてくるのである。同人達は、民俗学に関心を寄せるとともに、しばしば短詩型文学・小説等の実作に関わり、また考古学に関心を寄せた。そして雑誌『豊前』を発行し、そこを一つの場として小倉に関わる近世資料を翻刻共有し、同人同士の座談記録により互いの関心を登録し、また小倉の幕末維新から明治期の記憶をたどる「古老」たちの声を記録した。それらは当時の柳田の民俗学の範疇には入らない、しかし小倉郷土会には欠かせない切実な実

践だったのである。

旧制中学校や商業学校など地元で中等教育を受け、場合によっては上京して大学まで出て戻ってきた、文字を自在に操る力を身につけた者たちが、日常的に接しながら運動を具体化していく力を、私は「地域的な実践のリテラシー」と名付けた。このリテラシーという言葉には、ローカルな文化運動をリードし、民ゾク学にも関心を寄せるような主体がどのような背景を持ち、どのような知的な技を持っていたかを問う射程を与えたい。

こうした実践のリテラシーが具体化する運動は、しばしば領域横断的であり、人とひとの関係性を広げ、そして多様な「中央」の人や組織を、自分たちのローカルな運動の資源として使う。そうしたローカルの運動のなかに民俗学を置きなおしたとき、改めて民俗学はどのように見えるのだろうか。今回は、小倉郷土会とほぼ同じ時期に飛騨高山を中心に活動を展開していた『ひだびと』という場を例に考えてみる。

(2) 「ひだびと」という場と江馬修

『ひだびと』は、飛騨考古土俗学会の機関誌として、1935（昭和10）年1月から1944（昭和19）年5月にかけて112号にわたり、飛騨高山で発行された郷土研究誌である。

『ひだびと』を刊行した飛騨考古土俗学会は、1933（昭和8）年4月に結成された飛騨考古学会と土俗研究の団体が一九三四年一月に合体し結成され、当初研究誌『石冠』を発行し、同誌が1935年1月から『ひだびと』と誌名を変更し月刊雑誌となった。

飛騨考古土俗学会の結成と『ひだびと』刊行は、高山出身の作家・江馬修が媒介となって、文化運動に参加しうる地元のリテラシー層をそこに結集して可能になったことは間違いない。江馬は、一八八九（明治二二）年に高山に生まれ、旧制斐太中学を中退し上京後、田山花袋に師事するなど、東京で文学を志した。そして長編『受難者』（一九一六）で作家としての地位を確立する。その後、社会主義運動に関わり日本プロレタリア作家同盟の中央委員を務めていたが、思想弾圧が江馬の身辺でも厳しくなる。

そうしたなかで、江馬は、故郷飛騨の明治維新期の歴史的事件である梅村騒動という農民一揆を題材にした長編小説を執筆するために、1932（昭和7）年に20年ぶりに飛騨に帰省し、1ヶ月近く滞在し、その調査ため飛騨の農村地帯をあるいた。そして江馬はその後何度か飛騨高山と東京を行き来した後、1935年秋に家族とともに高山に移住することになる。

『ひだびと』発刊の経緯について、江馬自身は、次のように回想している〔江馬1989：21-213〕。江馬はかつて社会経済史を勉強したさいに有史以前の原始共産制への関心から考古学に興味を抱き、帰省後は、飛騨の山村にある遺跡での土器採集などにのめり込んでいった。

高山にも、単なる石器の蒐集家にすぎなかったが、考古学に興味を持ったものが、詩人福

田夕咲ほか数人あった。また、もっと少数ながら民俗の研究者もあって、山田白馬のように二十年来ひだの民謡を蒐集し、村々の踊りを丹念に調査しているものもあった。私はこういう人たちを誘って、飛騨考古土俗学会を結成した。そして月に一回ぐらい懇談会を開いたり、みんなで山村へ出かけて遺跡を発掘したり、民俗を採集したりした〔江馬同前〕。

江馬が中心となって雑誌を刊行することは、江馬自身の言によれば、「高山へもどるについて、私は一つの計画を抱いていた」と彼自身の企てであったという〔江馬前掲 215〕。「それまで考古学と民俗学の小さい研究グループで不定期に出していた会報を、定期的な月刊の郷土研究誌に改め、経営を私の個人的責任にして発行することであった」〔江馬同前〕。ある程度経営を成り立たせ、自身の経済的基盤の一つにしようとも考えていたようだ。

そして後に江馬自身は『ひだびと』について、「在来の郷土研究といえば、文献中心の一面的な固苦しいものが主」であったのに対して、『ひだびと』は「民俗学的方法と考古学的方法を併せ」、そして「農山村の社会経済史的な調査と研究を加えた」ため、広く全国から注目され売れるようになった、としている〔江馬同前〕。

初期の『ひだびと』は次のように投稿を募っている。

「ひだびと」は学会の機関誌とは言え、実質的には飛騨のものであり、郷土人みんなの雑誌であります。随ってあらゆる人々が共同の研究道場と考えられてどしどし原稿を送られん事を希望します。考古、民俗、文献、伝説、民謡、文芸、各自由です。(以下略)〔第三(1935)年第2号、なお以下本稿における引用は旧漢字歴史的仮名遣いは現代のそれにあらためる〕

基本的に学会という組織の外側に開いて投稿を募り、学会の雑誌というより、より広場性の高い雑誌を目指していたことがうかがえる。そしてそれを「共同の研究道場」とたとえ、「考古、民俗、文献、伝説、民謡、文芸、各自由」と扱う領域の幅広さを強調して誘った。一見すると多様な学の領域を並列しているように見えるが、それはむしろ文字(文献)資料中心主義を相対化する態度を示していると読めるだろう。

江馬は、その投稿募集が掲載された同じ号に「飛騨の歴史の見方」を掲載し、『ひだびと』の方針とも言える二つの態度を表明している〔以下江馬「飛騨の歴史の見方」第3(1935)年第2号〕。一つは「飛騨の歴史を日本の全歴史との相関関係において理解し、日本全史の中における飛騨の歴史の意義を把握する」という、郷土に自閉せずそれを日本全体のなかでとらえるという態度である。そしてもう一つは、「歴史」を「人間の生活、その社会的発展を意味する」ものととらえ、文献を中心とした歴史ではなく、「石器、土器のような物質的遺物」や「村々に遺存する古い土俗と伝承」など、「記録に現われない」「人間生活」を含めた歴史を志向する

態度だった。それは明らかに史資料の拡大を自覚した態度であり、それが先の「考古、民俗、文献、伝説、民謡、文芸、各自由」という物言いに呼応している。それはたとえば大学制度のなかで割拠するそれぞれの学を前提とするのではなく、むしろ「郷土」という現場で、史資料の拡大を自覚するという総合的な態度を宣言したものと読むべきだろう。そして『ひだびと』はその多様な様態の史資料と格闘する「研究道場」だということのである。

では、『ひだびと』がどのような場であったのか、その執筆者たちの顔ぶれから見てみよう【表1】。地元飛騨の執筆者の常連としては、江馬修、そして江馬の妻であり実質的な『ひだびと』の編集業務にあたった江馬三枝子、詩人であるとともに同誌に「山都年中行事」を連載した福田夕咲、民謡や民間信仰に関する報告を寄せた山田白馬、柳田國男の還暦を記念して実施された第一回の民俗学講習会にただ一人岐阜県から出席した村田祐作、画家であり郷土史を研究した富田稔彦（令禾）、当時は家業の酒造業に携わるとともに山の伝承や高山植物に造詣が深かった代情通蔵（山彦）、そして大正期以降の高山の郷土研究の中心的存在であった角竹喜登などがいた。

しかし一方で、『ひだびと』の特色は、飛騨の外部からの執筆者達の多彩な顔ぶれにある。東京帝大人類学教室の考古学者八幡一郎、文化史の喜田貞吉などは複数回の寄稿をしている。特に江馬が赤木清の名前で書いた「考古学的遺物と用途の問題」[第5（1937）年第9号]は、一つの議論を巻き起こした。江馬は、当時の考古学が専ら「編年」を重視し、「遺物」がどのように使われたか、遺物や住居址を通して生業や社会構成を再構成することを後回しにしていることを批判した。

それに対し東京帝大系の甲野勇「遺物用途問題と編年」[第5（1937）年11月]や八幡一郎「先史遺物用途の問題」[第6（1938）年第1号]などが、「用途」を問うにもクロノロジカルな追及が前提であると反論し、また民族学における物質文化研究について論じた杉浦健一も議論に参加している[杉浦「物質文化研究の歴史と理論」（第6（1938）年第3号）]。

ここで、後に「ひだびと論争」などと呼ばれるこの考古学の議論に深入りする準備はないが、そこには、考古学というディシプリン内部の態度と、考古「遺物」資料を含めた多様な史資料への拡大という態度を前提にして飛騨という「現場」で歴史に向き合おうとしていた江馬の態度との間の違いが見えるように思う。

同誌にはさらに第四高等学校教授で、万葉集の研究者であった鴻巣盛廣が長く論考を連載をしていることも注目していただろう。

そして民俗学の領域では1936年4月の「創刊三周年記念号」から橋浦泰雄が「首途のその頃」の連載を始めて以降、大間知篤三、最上孝敬、有賀喜左衛門、鈴木棠三、瀬川清子、倉田一郎、平山敏治郎、大藤時彦、大藤ゆき子、能田多代子、関敬吾など、柳田國男を中心に組織化された「民間伝承の会」の中核を構成する錚々たる顔ぶれが寄稿している。連載や複数回の

【表1】 雑誌『ひだびと』寄稿者について（判明分のみ）

本表は、2013年11月の「シンポジウム 東アジアの民俗学——歴史と課題」における報告に際して、会場でプリントとして配布した資料である。作業としては、あくまでも途中のものであり、全寄稿者を網羅しえておらず、個々の情報には偏りがある。しかし、一地方都市を拠点とした『ひだびと』がどのような場たりえていたかを、ある程度ながめわたすことができるだろう。本来なら一件ごとに、情報の出典を明記すべきであるが、今回は、それを果たせなかった。2013年の作成時には、民俗学関係者については『日本民俗学大系 第11巻 地方別調査研究』（1961）、その他の関係者については各種の事典類、国立国会図書館「サーチ」、また各地の研究者については各地の博物館や研究団体のホームページなども参照した。

執筆者名	属 性	最初の『ひだびと』掲載号
	【飛騨地方関係】	
荒垣秀雄	1903 吉城郡生，早大卒，東京朝日新聞社で記者を勤める	第6年（1938年）-第8号
海野金一郎	1903 宮城生，東北帝大医卒 S14~18 飛騨で勤務医	10（1942）-7
江馬 修（赤木 清） （多志弥一？）	1889 高山生，斐太中中退，上京して田山花袋に師事，文学を志す。長編『受難者』1914で作家として地位確立。1935年高山移住，『ひだびと』創刊，『山の民』執筆	3（1935）-1 （赤木 清 3（1935）-2）
江馬三枝子	1903 北海道生まれ 修と結婚，『ひだびと』編集，白川郷を調査，『飛騨の女たち』1942	3（1935）-2
大野政雄	1910年生，斐太中教員をつとめ，飛騨の国学者・田中大秀の研究など郷土史・考古学研究などに関わる。『飛騨の文化・斐太の歴史 大野政雄著述集』2011	11（1943）-11
柿下醒緑	柿下清六か？ 排号は青緑 斐太中卒 葉種問屋	9（1941）-11
笠井 亘	1919生，斐太中卒 満州国職員を経てS21 中日新聞に	7（1939）-3
林下教馬	三井金属鉱山神岡鉱業所	4（1936）-2
桂 美津夫	詩人，飛騨文芸研究会同人 共著詩集『山のうた』	11（1943）-5
加藤輝次	1802生，斐太中卒 神戸高商から飛騨銀行，後に取締役，飛騨の考古学の先覚	3（1935）-1
小鷹ぬい	1844年生，村名主の妻，江馬修が梅村騒動を実見した話者として発見，通う。	3（1935）-1
小鷹ふさ	1912年生，小鷹ぬいの長男・清通の妻，俳人，『ひだびと』に俗信について寄稿	5（1937）-10
後藤秋五郎	『飛騨文化史概観』1944を著す	6（1938）-6
小林 幹	1903高山生，斐太中・岐阜師範卒，小学校教員の傍ら郷土研究，農村生活の写真を写す	6（1938）-1
柴田忠太郎（袖水）	1868生 小学校教師を勤め郷土史研究をすすめる。『高原郷土史』刊行	3（1935）-6
白川鳥衣	飛騨考古民俗学会以前に，山田白馬，福田夕咲，代情通蔵らと土俗調査をする	4（1936）-7
角竹喜登（如山）	1885高山生，斐太中を経て代用教員から教員，県視学，斐太中教諭，飛騨地方の歴史研究の中心的存在，S14より高山市史編集に関わる，角竹文庫は高山市の文化財	3（1935）-2
富田豊彦	1860生。日枝神社の神職，斐太中学教諭を務める。国学者。「飛騨古今詠歌人名録」	4（1936）-2
富田稔彦（令禾）	1893高山生，斐太中卒，東京美術学校中退，京都絵画専卒，画家，歌人，郷土史研究	3（1935）-2
中野善太郎	飛騨山岳会会員 編著『国立公園と飛騨高原峡』1933	5（1937）-3
早川 章	1862生，岐阜県師範卒，久々野小校長・同村村長，郷土史，歌人，号は秋良	3（1935）-3
平田誠二	1901生 平田酒造 斐太中卒，早大法卒	4（1936）-1
船坂子猷	1892生，高山市議を経てS13に高山市助役，歌人，福田夕咲と劇団孔雀会を設立する	3（1935）-5
福田有作（夕咲）	1886高山生，斐太中卒，早大文卒，読売新聞社入社，文芸欄担当，相馬御風，若山牧水などと交わり，山村慕土と「自由詩社」結成，1914年飛騨に帰り，郷土の文化運動の中心的存在になる。山百合詩社1918などを結成する。	3（1935）-1

知の実践のかたちとローカリティ（重信）

執筆者名	属性	最初の『ひだびと』掲載号
	【飛騨地方関係】	
前田光次郎	1946 商工経済会高山支部事務長。敗戦直後「岐阜タイムス」に「民主主義の天皇」寄稿	4 (1936)-5
牧野良三	1885 生 斐太中卒 東京帝大法卒 弁護士から大9年衆議院議員 戦後法務大臣	10 (1942)-10
三浦薫雄 ^{しげお}	1902 生 斐太中卒 早大法卒 萬朝報、国民新聞を経てS2年に読売新聞政治部	3 (1935)-1
三島富丸（常馨）	1896 生 斐太中卒 東洋大哲学卒、画家・彫刻家 S16 飛騨美術協会初代会長	3 (1935)-1
村田祐作	1911 高山生、小学校高等科卒、歌人、農村の民俗の研究、第一回民俗学講習会に岐阜県からただ一人の参加、山脈詩派	3 (1935)-4
森瀬斎一郎	桂美津夫と共著で詩集『山のうた』1942、著『飛騨の城』1968	7 (1939)-7
山田鎌太郎（白馬）	1892 高山生、大正中から昭和初にかけて民謡の調査、S18 郷土芸能研究会発起人	3 (1935)-1
代情通蔵（山彦）	1898 高山生、斐太中卒、大阪高等工業醸造科卒、家業の酒造をつぎ、S6 民芸店山彦堂を起す、戦後教職に、斐太高校校長、山の奇談、高山動植物への造詣が深かった、	3 (1935)-3
和仁市太郎	1910 生 詩人 東京で謄写印刷学び S8 美踏社工房、山脈詩派・飛騨作家等同人	4 (1936)-1
	【考古学関係【全国】】	
梅原末治	1893 生 東洋考古学、朝鮮総督府古跡調査委員等を経て京都帝大考古学教室助教授に	8 (1940)-9
大場磐雄	1899 生、鳥居龍造に考古学を学び、国学院大史学科卒、国学院大教授に	6 (1938)-6
清野謙次	1885 生、京大医卒、京都帝大医学部教授 病理学・人類学・考古学	5 (1937)-4
甲野 勇	1901 生、東京帝大卒、考古学、戦後、国立音大教授	5 (1937)-11
杉原荘介	1913 東京生 東京外語仏語、上智外語独語を経て明治大専門部地歴を出る、19歳の時より東京人類学会会員として活躍 戦後明大教授	5 (1937)-4
長谷部言人	1882 東京生、東京帝大医卒、東北帝大医教授からS13 東京帝大理人学教室教授に	8 (1940)-3
濱田耕作（青陵）	1881 大阪生、東京帝大文科史学科卒、1909 京都帝大文講師に、1916 同大考古学教授	4 (1936)-4
三森定男	考古学、京都帝大・濱田耕作門下で学ぶ。著『日本原始文化』四海書房 1941	4 (1936)-9
八幡一郎	1902 長野生、東京帝大人類学卒、助手・講師、考古学専攻、S18 民族研究所所員 考古学、戦後、東京教育大教授	3 (1935)-2
	【歴史学・国文学 その他【全国】】	
大池菅根	東京市立中学校教諭から東京市立ろう学校初代校長	7 (1939)-3
小田内通敏	地理学 1875 生、高等師範卒、早大で教鞭、S5 文部省囑託、郷土教育聯盟設立に関わる	6 (1938)-5
角川源義	国文学・出版、1917 富山生、国学院大卒、折口信夫に師事、	7 (1939)-12
喜田貞吉	文化史、1871 徳島生、帝大文科国史学卒、1913 年京帝大講師、1920 東北帝大講師	4 (1936)-9
鴻巣盛広	国文学・万葉研究、1882 岐阜生、東京帝大国史学卒、第七高教授へて1916 第四高教授	3 (1935)-10
小山いと子	小説家、1901 高知生、S8「海門橋」、S25「執行猶予」で直木賞	
頼原退蔵	1894 長崎生、徘徊を中心とした近世文学研究、京都帝大卒、京都帝大助教授	10 (1942)-10
澤田瑞穂	中国文学、1912 生 早稲田大学教授	10 (1942)-9
柴田 武	言語学、方言学、1918 愛知生、東京帝大卒、戦後、東京外大教授を経て東大教授	8 (1940)-4

人 文 学 報

執筆者名	属 性	最初の『ひだびと』掲載号
	【歴史学・国文学 その他【全国】】	
杉本 寿	『木地師制度の研究①②』1974・76	6 (1938)-10
多賀秋五郎	東洋史, 1912 岐阜生, 東京文理大卒, 中央大学教授『中国宗譜の研究j』1981・82	9 (1941)-2
田村栄太郎	歴史学 1893 群馬生 歴史家 高崎商業卒, 農民運動に参加後, S4 に上京, 歴史研究と文筆業, 『日本農民一揆録』1930 『一揆・雲助・博徒』1933 『日本風俗史』1936 等	6 (1938)-6
塚崎 進	国文学 1918 福井生, 慶応義塾大卒, 折口信夫の師事, 『物語の誕生』1955	11 (1943)-3
藤間生太	歴史家 1913 広島生, 早大史学科卒, 当時は日本評論社, 戦後「民科」常任書記長	9 (1941)-12
利倉幸一	歌舞伎評論・演劇評論, 1905 京都生, 同志社大中退	11 (1943)-5
中山太郎	民俗学, 1876 生	11 (1943)-12
野口善春	脚本家・演出家	10 (1942)-3
野村俊夫	詩人 1904 福島生, 1924 福島民友新聞社入社, 1930 年代から詩人・作詞家として活躍	5 (1937)-12
袋 一平	ロシア語翻訳家, 1897 生, 東京外語ロシア語科卒, 日本山岳会会員	6 (1938)-7
藤森成吉	小説家・劇作家 1892 長野生, 東京帝大独文卒 『何が彼女をそうさせたか』1927	10 (1942)-1
古谷綱武	文芸評論家, 1908 生	11 (1943)-12
町田嘉章 (佳声)	民謡研究, 作曲, 1888 群馬生, 東京美術学校卒, 中外新報記者, 東京放送協会	8 (1940)-8
宮本勢助	服飾史・風俗史, 1884 年東京生まれ 画家を志し歴史画から有職故実・風俗史研究に	7 (1939)-5
	【柳田國男・「民間伝承の会」関係】	
大藤時彦	1902 山口生, 早稲田大文中退	6 (1938)-7
大藤ゆき子	1910 福岡生, 東京女子大高等学部卒	7 (1939)-2
大間知篤三	1900 富山生, 東京帝大独文卒,	4 (1936)-8
倉田一郎	1906 富山生, 県立高岡工芸学校中退, 文学を志し上京, S9 より木曜会に参加	5 (1937)-10
今野円輔	1914 福島生, 慶応義塾文卒, 毎日新聞	8 (1940)-8
杉浦健一	1905 生, 東京帝大文卒, 木曜会同人の後, 南洋庁嘱託, 戦後・東京大学教養学部教授	6 (1938)-3
鈴木棠三	1888 静岡生, 国学院大卒	4 (1936)-11
関 敬吾	1899 長崎生, 東洋大卒,	8 (1940)-6
瀬川清子	1895 秋田生, 東洋大専門部倫理卒	7 (1939)-2
千葉徳爾	1916 千葉生, 東京高等師範学校卒	9 (1941)-9
直江廣治	1917 青森生, 東京文理大卒, S17 北京の輔仁大学講師になる	
能田多代子	1888 青森生,	6 (1938)-6
橋浦泰雄	1888 鳥取生, 日本画家,	4 (1936)-4
最上孝敬	1899 石川生, 東京帝大経済卒, 統計学	4 (1936)-12
柳田國男	1875 兵庫生, 東京帝大法卒	5 (1937)-3
山口貞夫	1908 京城生, 東京帝大理学部地理学科卒, 地理学, 木曜会に参加 1942・6 没	8 (1940)-1
	【各地の研究者】	
有賀喜左衛門	長野 1897 長野生, 東京帝大文美術史卒, 大学院を経た後柳田に接する。後, 社会学に	4 (1936)-11
飯沼健男	岐阜? 「羽鳥郡神社一覽」(1933) 著者。岐阜の郷土研究者?	9 (1941)-10
伊藤晃雄	愛知県津島の郷土研究者か? 「津島の屋根神様」「津島神社と津島祭略年賦」などの著作	11 (1943)-5

知の実践のかたちとローカリティ（重信）

執筆者名	属性	最初の『ひだびと』掲載号
	【各地の研究者】	
石塚尊俊	島根、民俗学、1918 島根生、国学院大卒	11 (1943)-6
牛尾三千夫	島根、国学院で折口信夫・西角井正慶に師事、帰郷後民俗研究、S13「島根民俗」主宰	8 (1940)-7
桂井和雄	高知、1907 高知生、早大中退	11 (1943)-3
栗山一夫（赤松啓介）	兵庫・播磨 1909 生、独学で民俗学を学ぶ、行商の傍ら民俗調査	6 (1938)-12
大森義憲	山梨 1907 山梨県忍野村生まれ、慶応義塾大で折口に師事、故郷の村の郵便局長をしながら民俗調査を続ける。	10 (1942)-12
草薙金四郎	香川 1905 香川県琴平生まれ、教員で郷土史研究を続ける。『讃岐風土記』1962 など。	7 (1939)-12
小寺廉吉	富山 地理学、1892 東京生、東京高等商業、戦後、富山大経済学部教授	6 (1938)-1
小林 存	新潟 1877 生、東京専門学校（早大）卒、新潟新聞主筆、『高志路』を発行	6 (1938)-7
斉藤 優	福井 1910 福井・鯖江生まれ、中学中退の後、考古学に興味をもち京都帝大考古学教室に行き、濱田耕作、梅原末次の指導をうけ、福井で考古学	
佐久間 昇	山形 『肘折温泉の歴史』1966	12 (1944)-3・4
庄司吉之助	福島 1905 福島生、小学卒、日本経済史を独学、自由民権運動や一揆研究、福島大教授	9 (1941)-1
高桑敬親	富山 1904 富山生、円浄寺住職、小学校校長などつとめ五箇山を中心とした郷土史・民俗研究、「こきりこ」を発掘し魅せたとされている	11 (1943)-12
高谷重夫	大阪 1915 大阪生、京都帝大国史学科、中学高校教員の傍ら民俗学、大阪民俗談話会	8 (1940)-1
高橋文太郎	東京、1903 東京生、明大卒、同大山岳部、武蔵野鉄道（西武鉄道）勤務、S9 同社重役、木地師、マタギなど山の民俗研究をすすめる、『山の人達』1938	5 (1937)-8
竹内利美	伊那 1909 長野生、中学卒後 1939 まで小学教諭、国学院卒、社会学、戦後東北大教授	6 (1938)-2
武田 明	香川 民俗学、1913 香川生、慶応義塾大卒、	7 (1939)-7
田中善一	名古屋？ 名古屋郷土文化会『熱田神宮とその周辺』1968	10 (1942)-8
遠山正雄	宮司 「イワクラ」・岩石信仰の研究	5 (1937)-1
富田準作	静岡・遠州を中心に郷土研究、『都田村郷土誌』1940	11 (1943)-3
長岡博男	金沢 1907 生、東京医専卒、眼科医、金沢民俗談話会主宰、S24 加能民俗の会設立	5 (1937)-11
中村将為（星湖）	山梨 1884 山梨生、早大英文卒、坪内逍遙・鳥村抱月に師事、文芸評論・小説、山梨の文化団体「山人会」を結成 1926	7 (1939)-1
中山徳太郎	佐渡 1875 佐渡生、千葉医専卒、故郷で産婦人科医の傍ら郷土研究、青木重孝と共著『佐渡年中行事』1938、また河東碧梧桐に師事、佐渡の俳句の中心に、俳号「鳥賊」	6 (1938)-4
野口長義	東京新宿在住の民俗学者 「私有財産を保護する俗信」（『民間伝承』5-4 1940-1）	7 (1939)-4
箱山貴太郎	長野 1907 長野生、上田中卒、小学校教諭 民俗学	5 (1937)-9
羽柴雄輔	山形 1852 山形・飽海生まれ、地元の小学校校長などを勤める、明 19 に東京人類学会会員になる、1890 年奥羽人類学会設立	11 (1943)-3
畑 寅雄	三重 1913 生「アマ（いろり）に居る魂」（『民間伝承』10-3 1944-3）	10 (1942)-7
早川荘作	富山 1888 富山生、魚津中学教諭、坪井正五郎を通じて考古学を始め、S24 に富山考古学会を設立、富山の考古学の先覚。	4 (1936)-2
林 魁一	岐阜 1874 生。郷土の考古学をすすめる『東京人類学会雑誌』などに寄稿	4 (1936)-2
久永春夫	愛知 1909 生、愛知の考古学者	8 (1940)-4

人 文 学 報

執筆者名	属 性	最初の『ひだびと』掲載号
	【各地の研究者】	
平山敏治郎	大阪 1913 東京生, 京都帝大国史学卒, 大学院, 副手助手講師, 大阪民俗談話会	5 (1937)-11
松永美吉	福岡・北九州 海事審判署の事務官のかたわら方言・民俗の研究, 門司郷土会会員	7 (1939)-7
松本俊吉	奈良 著『奈良の民話』未来社 1957, 『大和考古資料目録第 12 集松本俊吉氏収集資料』橿原考古学研究所付属博物館 1984	10 (1942)-8
丸山敏雄	北九州 1892 福岡生, 広島文理大卒, 教員をしながら古代史研究, 後に倫理研究へ	10 (1942)-9
三木春露	香川 著『讃岐風土記』旅行文化出版部 1944, 著『讃岐民話集』旅行文化出版部 1944	11 (1943)-12
宮坂英武	長野 1887 生, 諏訪中学卒, 小学校教員の傍ら考古学, S4 より尖石遺跡の発掘をする	7 (1939)-1
森 義一	岐阜 1890 生, 新聞記者, 農民運動家を経て, S9 岐阜市議員, 著『岐阜県政五十年史』1941, 著『岐阜手漉紙沿革史』1946	6 (1938)-11
森脇太一	鳥根 教員の傍ら郷土研究 宮本常一との邂逅から民俗学へ, 森脇編『邑智郡誌』1937	8 (1940)-5
宮本常一	大阪 1907 山口周防大島生, 天王寺師範卒, 小学校教員の傍ら民俗研究, 大阪民俗談話会, 1939 より渋沢敬三アチック・ミュージアムの研究員	5 (1937)-3
山口麻太郎	沓岐 1891 沓岐生, 上京して文学を志し, 日本の上代文学に関心を持つ, 帰省後, 詩の同人を通して仲間を募り, 沓岐史顕彰会を結成, 沓岐での郷土研究を展開。	9 (1941)-3
山口常助	愛媛 宇和島で民俗研究に従事, 南予民俗研究会を結成, 『南予民俗』を発刊	10 (1942)-6
山本修之助	佐渡 1903 生, 佐渡中中退, 俳句, 詩作とともに郷土研究, 新潟貯蓄銀行真野代理店などに勤務	8 (1940)-1
吉田富夫	名古屋, 考古学, 1912 名古屋生, 愛知国学院専攻科卒, 濱田耕作の指導, 地元で活動	6 (1938)-1
和気周一	香川 S13 武田明らと讃岐民俗研究会を結成, 郷土の民俗研究をすすめる	10 (1942)-6
和田文夫	福島 1916 生, 農業に従事しながら柳田國男に師事をあおぎ民俗研究, 磐城民俗研究会を結成	10 (1942)-8

掲載をしている者も少なくない。大藤時彦は「日本民俗研究小史」として当時はまだ珍しい学史を4回にわたり連載し〔第6(1938)年〕, 関敬吾は「民俗学の二三の問題」として日本民俗学講座の講義録を2回にわたり掲載した〔第8(1940)年〕。また山口貞夫はフランスの民俗学者・サンチーブによる民俗学の概説書の翻訳を連載している〔第8(1940)年~第9年〕。「ひだびと」に寄稿した民俗学者たちは, それぞれ“とんがった”寄稿をしていたと言えるだろう。

そして柳田國男は, 「団子浄土」〔第5(1937)年3号〕, 「飛驒と郷土研究」〔第5年8号〕, 「耳たぶの穴」〔第6(1938)年第8号〕, 「文化と民俗学」〔第10(1942)年第10号〕などを寄稿している。「飛驒と郷土研究」は, 1937年6月下旬に柳田が京都帝国大学で5回の講義を行った帰途, 7月3日に高山に寄り座談会と講演を行ったときの講演記録である〔『ひだびと』第5年8号, 江馬三枝子による編集後記〕。そこで柳田が語りかけたのは, 「大きな問題」をもっと「小さな問題」にわけて, 答えに早上がりするのではなく, 各地の「小さな問題」を出し合い, 狭い愛郷

心にとらわれずに「各地の共同研究」を行う必要性であった。そして柳田は「私の気持ちでは、『ひだびと』とは単にひだに生活する人々というだけの意味でなく、同様に生活する人々をひろく含む意味に取らせたい」とよびかけた。1942年の「文化と民俗学」は、戦時下に「新体制」をかかげた大政翼賛会の地方文化運動に対応した飛騨文化連盟が、「ひだびと」を拠点にして活動を始めた時期に寄稿されたものだった。

橋浦泰雄が関わったことを契機に、柳田とその周辺の人々が関わるようになっていくパターンは、小倉郷土会の場合とよく似ている。柳田たちが地方の団体をオルグしていく時の一つのかたちだったのかもしれない。しかし一方で江馬は、飛騨を出奔し文学を志して山田花袋の書生をしていた時に、既に柳田にまみえており、柳田の協力を特に得ることができたと考えることもできる。

また『ひだびと』は、柳田周辺の人脈が交錯するだけでなく、ローカルな運動に関わる者同士の交錯を見ることもできる。たとえば、長野の箱山貴太郎、兵庫の栗山一夫（赤松啓介）、大阪の宮本常一、新潟の小林存、島根の森脇太一、壱岐の山口麻太郎、土佐の桂井和雄などによる複数回の寄稿がある。

『ひだびと』は、飛騨における文化運動と、柳田を中心とする民間伝承の会の人脈や中央の考古学者、そして各地の文化運動の実践家達が交錯する場たりえていたのである。

(3) 実践のつながり

民俗学に関しては、一見まるで民間伝承の会の「植民地」のようにも見えかねない『ひだびと』であるが、そう見えるのは、往々にして私たちが「一国民俗学」史の眼鏡を通して、そこに柳田國男を始めとするよく知られた名前を見つけ出してしまうからでもある。この雑誌に積極的に寄稿した地元の常連達の背後をもう少し押し広げてみよう。

高山には、近世以来の町の旦那衆の文化が根つき、それが春秋の高山祭に繰り出す華麗な屋台をつくりあげる経済的基盤をもたらした。また18世紀後半に、2代続いた郡代・大原彦四郎・亀五郎父子の暴政に対する19年にわたる農民の反乱、いわゆる大原騒動を通して、町衆が自分達のあり方を自省し、農民の恤救や、町の結束を固める祭の実施にたずさわり、また町を横断して結束させるさまざまな文化運動を組織したという〔芳賀1983〕。

明治初期に、高山が岐阜県で最も大きな町場であり、その頃、国学を学んだ幕末の地役人だった富田禮彦（いやひこ）によって飛騨の地誌『斐太後風土記』がまとめられたことなど、町に刻まれたリテラシーの系譜が、近代以降の飛騨の文化運動にも息づいている。

『ひだびと』の常連寄稿者である、先に挙げた福田夕咲、山田白馬、富田令禾、村田祐作、代情通蔵、和仁市太郎といった人たちもまた、飛騨の文化運動の実践の展開のなかに居る。

【表2】は、明治半ば過ぎから第二次大戦直後まで、飛騨高山を中心に結成された文学や歴

史、山岳に関連する運動団体や同人雑誌を、総てを網羅しえたわけではないが、時系列と横の拡がりで見渡すことができるようにした一覧である。ローカルな文化運動は、大きく歴史系、文学系にわけることができる。しかしここでは、多様な領域にわたる総合的な「郷土」研究を展開することを標榜した『ひだびと』という場を、「郷土研究・総合系」という枠組を設けて位置づけた。「歴史系」「文学系」に加え「総合系」の三項にすることで、ジャンルをまたがって文化的な実践に参加する人の動きをよりはっきりと把握できるだろう。

飛騨高山には、『ひだびと』の先行雑誌ともいえる『飛騨史壇』が存在していた。1914（大

【表2】 飛騨地域の文化運動とローカルな雑誌等による「場」の展開

歴史系	郷土研究（総合）系	短詩型文学等文学系
	1900（明治34）『有斐』斐太中学校校友会（明33発足）校友誌	
1914（大正3）飛騨史談会結成・『飛騨史壇』創刊（～1934（昭和9）まで）〔→岡村利平（医師）・押上森蔵（退役軍人）・角竹喜登らが中心、富田令禾「飛騨の口碑」と伝説〕、福田夕咲は考古学エッセイを投稿	1916（大正5）松浦潮『飛騨日報』創刊（後の飛騨毎日新聞）	1914（大正3）詩誌『ツチグモ』創刊 福田夕咲・瀧井孝作
	1920（大正9）飛騨山刀俱樂部（山岳会）『山郷新誌』創刊・福田夕咲	1918（大正7）詩誌『クラジシ』創刊 福田夕咲 1918 山百合詩社 福田夕咲・山田白馬
	1923（大正12）住広造、神岡鉱山に石炭を鉋す事業の利益をもとで斐太中央印刷開業。歴史資料の発行などにたずさわる	1923（大正12）俳誌『素顔』創刊 福田夕咲・福田鶴雲 1923 山百合詩社詩誌『静かなる響宴』創刊〔→後1946（昭和21）飛騨短歌会へ〕
1932（昭和7）江馬修 飛騨に帰省、梅村騒動の取材開始		1926（大正15）『朱筆』創刊・福田夕咲・富田令禾
1933（昭和8）江馬修 飛騨考古学会結成 福田夕咲参加 『石冠』孔版で創刊		1929（昭和4）詩誌『悲陀』福田夕咲・山田白馬 1930（昭和5）茨の花詩社結成、吉村比呂詩・福田夕咲、『茨の花』発行
1936（昭和11）福田夕咲・飛騨考古土俗学会より『ひだびと』に連載した記事を『山都年中行事』として刊行	1935（昭和10）江馬修 飛騨考古学会を飛騨考古土俗学会に改組して『石冠』を改名、『ひだびと』創刊〔『ひだびと』寄稿者 江馬、江馬三枝子、福田夕咲・山田白馬、富田令禾、村田祐作など地元の寄稿者に加え、柳田国男、八幡一郎、橋浦泰雄などが執筆、『ひだびと』は全112巻昭和19年まで刊行〕	1932（昭和7）裸形詩社『裸形』創刊 1933（昭和8）山脈詩派結成 和仁市太郎・村田祐作 1933（昭和8）『鈍削仏』創刊、吉村比呂詩・福田夕咲
	1941（昭和16）飛騨文化連盟結成（大政翼賛会地方文化運動）理事・江馬修（連盟参加団体は、九月舎、裸形詩社、山脈詩派、山百合詩社、春園歌会、飛騨考古土俗学会、郷土研究会、飛騨山岳会、釣交会、飛騨スキー倶楽部、北飛山岳会、高山音楽聯盟、光豊会、寫友会、高山壮年団文化部、飛騨体育協会など全30団体、以上『ひだびと』第9年4号より、江馬はもともと結成していた素人演劇・高山芸術座を基盤に演劇部を設置、郷土演劇運動に尽力、脚本「長兵衛おやじ」「案山子」などを書く）	
	1943（昭和18）郷土芸能研究会結成	
	1944（昭和19）江馬『郷土演劇 理論と実際』発行	
	1947（昭和22）『新飛騨』創刊 白木久七（～昭和23まで）	1946（昭和21）道連吟社結成、『権の実』創刊（白川正中、山下苗郎、福田夕咲他）・1946飛騨短歌会結成『飛騨短歌』創刊（福田夕咲、富田令禾、鎌田白映、山田白馬他）
	1948（昭和23）『飛騨春秋』創刊 桑谷正道（～平成18年まで刊行）	

【参考文献】+『高山市史 下巻（復刻版）（高山印刷理論社）+『飛騨人物事典』（高山市民時報社 2000）

1981）+江馬修『一作家の歩み』日本図書センター 1989（原著 1957

【註】 雑誌は創刊を確認、継続終刊休刊は未確認

正3)年に、医師・岡村利平、退役軍人・押上森蔵、そして郡上郡視学や旧制斐太中学教諭などを歴任し飛騨の郷土史をリードした角竹喜登らを中心に飛騨史談会が結成され、同誌を1933（昭和8）年まで刊行した。歴史、考古、土俗などにわたる論考や資料紹介を中心とした記事により構成されていた。そして同誌にはほぼ毎号掲載されていた「飛騨日誌」は、高山での行事・催事の情報、飛騨を訪れた著名人の動向、そして飛騨出身者の活躍などを、時系列で編んだ記事であり、今日から見ると広い意味での飛騨文化年表として読むことができる。

同誌には、後に『ひだびと』の常連寄稿者となる角竹喜登はもとより、福田夕咲が考古学関連のエッセイを寄せ、また富田令禾が飛騨の口碑と伝説に関する論考を載せている。そして、ちょうど同誌の休刊を受けて、『ひだびと』が引き継ぐようなかたちで発行され始めるのである。

そして飛騨では、こうした歴史系の団体の他に、短詩型文学を中心とした文学系の団体、さらには飛騨の特質を反映した山岳系の団体や同人などが多様に展開していた。そうした実践の拡がりのなかで、ここでは特に、『ひだびと』の常連執筆者である福田夕咲を中心に、山田白馬、富田令禾が関わった運動について見ておこう。

『ひだびと』に「山都年中行事」を連載し、飛騨考古土俗学会から同名の書籍を刊行した福田夕咲（有作）は、大正から昭和にかけての飛騨の文化運動を推進した中心人物の一人であった。1886（明治19）年、高山生まれ、旧制斐太中学を卒業し、早稲田大学文学部にすすみ、その頃に夕咲を名乗り始める。卒業後、読売新聞に入社し文芸欄を担当するとともに、山村慕鳥と自由詩社を結成し、詩の創作を始めている。1914（大正3）年に家庭の事情で高山に帰り、以後、高山を拠点に活動を始める〔以上、斐太高1995〕。福田が、東京で詩の同人結社の結成と活動に関わっていたことは、その後の飛騨高山での活発な活動の下地になっていただろうと考えられる。それらを概観しておこう。

1914（大正3）年に同じく飛騨出身の瀧井孝作と『ツチゲモ』を創刊、1918（大正7）年に山田白馬と山百合詩社を結成し1923（大正12）年に詩誌『静かなる饗宴』の発行につながる。1920（大正9）年には山岳会ともいえる飛騨山刀倶楽部を立ち上げ『山郷新誌』を創刊する。1926（大正15）年には同人誌『朱筆』を富田令禾とともに発行する。そして1929（昭和4）年に山田白馬と『悲陀』を創刊する。さらに夕咲は吉村比呂詩と1930（昭和5）年に茨の花詩社を結成『茨の花』を出し、1933（昭和8）年には吉村と『鉦削仏』を刊行した。吉村は旧制斐太中卒、岐阜県教員養成所を経て1927（昭和2）年から1946（昭和21）年まで飛騨で教員をしていた。

福田は、『ひだびと』に稿を寄せる常連となる山田白馬や富田令禾と、短詩型文学を媒介に数々の活動の場を共有していたのである。山田白馬は既に紹介した江馬の回想のなかにあったように早くから民謡を蒐集していた。また富田令禾は、1893（明治26）年、高山の陣屋の地役

人の家に生まれ、明治初期に『斐太後風土記』を著した富田禮彦の一族にあたる。旧制斐太中学を卒業後、東京美術学校に進むも病気で中退、その後京都絵画専門学校に入学。画家として山岳画を多く描くとともに、短歌、郷土研究などにも関わっていた〔斐太高 1995: 76〕。こうしてみると、福田夕咲、山田白馬、富田令禾らにとって『ひだびと』は、郷土で展開した文芸を中心とする活発な文化運動の場の一つであったというべきであろう。そして敗戦後 1946（昭和 21）年に福田夕咲、富田令禾、山田白馬が揃って立ち上げたのは、飛騨短歌会であった。

福田らにとっては短歌や詩、考古学そして土俗はそれぞれ別のものというより、一つの実践のリテラシーが具体化したフレキシブルな選択肢だったように見える。

そしてまた、総力戦下に大政翼賛会が全国に呼びかけた地方文化運動に呼応して結成された飛騨文化連盟も、江馬修と『ひだびと』という場が、下地になったことが推測できる。それは、小倉郷土会に中核として参加した人々が中心になって具体化された北九州文化連盟の場合とも重なりうる経緯といえる〔北河賢三編 2003: 349-381〕〔重信 2009〕。動員とこうした民俗学を含めたローカルな文化の実践の関わりについては稿をあらため論じたい。

ところで、当時『ひだびと』を何度も「紹介と批評」欄にとりあげ叱咤激励していた雑誌『民間伝承』が、ある時「我々は本誌の益々の発展するを期待して居ると同時に、土俗というような語が、本誌を発刊する学会の名称として既に不適切なものとなりつつあることを感じさせられる。（大間知）」〔『民間伝承』第 8 号・1936 年 4 月〕とやや高みから述べた言葉を、「ひだびと」の面々は果たしてどのように受けとめたのだろうか。多様な史資料の拡大のなかの一つとして伝承に着目した「ひだびと」たちにとって、土俗だろうが民俗だろうが、名称はどちらでもよかったのではなかったか。すでに民俗学を標榜する学の内部に閉じ始めたように見える「民間伝承の会」と、『ひだびと』の志向の相違が見える、と言ったら言い過ぎだろうか。

ここでは、互いに団体や結社を組織し、雑誌を出すといった実践のかたちをつくり、そこを拠点に関係性をつなげながらローカルな活動を展開していた「ひだびと」たちのリテラシーの力に着目しておきたい。

柳田達が、民俗学へとオルグしようとした知性は、ローカルな実践のなかにこうした根を張り伸ばしていたものだったのであり、少なくとも、この揺籃があって初めて柳田たちも参加し得た『ひだびと』という場が、成り立ったといえることができる。

(4) 「生活」の歴史と近代への視線

『ひだびと』は、18 世紀後半に起きた大原騒動について大沼村の農民、忠次郎が書き残した記録『夢物語』全 10 巻を翻刻紹介している〔第 3（1935）年 8 号～第 4 年 12 号〕。一揆に関する記録のなかで、特に農民自身による記録を取り上げ、雑誌という場を使い史資料として共有したことは、明らかに『ひだびと』の編集方針による一つの選択であっただろう。

編集のコンセプトを握っていたのは間違いなく江馬修であり、江馬の姿勢から『ひだびと』という場が何を志向していたかを検討しておこう。

江馬は、飛騨に帰省し移り住む前には、マルクスの「資本論」を読み、河上肇に接近しプロレタリア文学運動に関わっていた。江馬は、考古学と民俗学を『ひだびと』の二本柱にすえたとき、民俗学についてどのような認識を持っていたのだろうか。回想という後づけの言葉ではあるが、次のように述べている。

（略）柳田国男の三十年にわたる隠れた民俗の研究が、折からひろく世間に認められてきて、新しい郷土研究の機運が全国的にみなぎってきたことである。もっとも、この機運が、戦時の排外的な愛国主義や愛郷運動に結びついていたのは否定しがたい事実であって、「ひだびと」がとにかく継続していられたのは少なくとも当局筋がそういう眼でみていたからである。ところが、柳田民俗学の積極的な面は、歴史をみる眼を古いやり方と違って、ひたすら民衆の生活と歴史にむけさせた点にあった。この点人民大衆をもって歴史の真の創造者と見なしている私たちにとって大いに活用すべきところであった。〔江馬 1989: 218〕

それは決して単なる民間伝承の研究を目的として柳田へ接近したのではなく、あくまでも「民衆の生活と歴史」の見方を自覚したうえでの選択であり「活用」だったことになる。先に触れたように、江馬が「日本の全歴史」との「相関関係のなかで」「飛騨の歴史」をとらえるとし、その「歴史」を「人間の生活、その社会的生活の発展」としていたことをもう一度想起したい〔江馬「飛騨の歴史の見方」第3（1935）年第2号〕。あくまでも、その「生活」の歴史を捉えるために、遺物資料、土俗資料、そして文献資料や文芸へという素材と方法の拡がりを目指していたのである。

そして江馬自身は飛騨の明治維新期の事件である梅村騒動に取材した長編小説の構想を抱いて帰省した。1867（慶応3）年、高山県知事として赴任した梅村速見の風紀粛清やぜいたく禁止の政策、特に山地民への恤救米である山方米の廃止などに農民が反発し、1868（明治2）年に一揆が起きた〔田中 1992: 10-13〕。それが梅村騒動である。

江馬の回想によると、構想した作品により「この遅れた山国で起こった大一揆をとおして、何より人民大衆の力が歴史の基本的な推進力としてもっとも力強く作用している事実」をはっきりとらえると同時に、「明治維新の革命的な側面と反動的な側面」を同時にとらえることができると考えていたという〔江馬 1989: 206〕。そのために騒動に関わった、当時既に70歳から80歳になっている老人を探して聞き書きをしてまわった。それにより江馬は、農民の暮らしに接するとともに「文献ではとうていいうかがい知ることができない」「事実と空気」を学ぶことになった〔江馬前掲 206-207〕。

初期の『ひだびと』誌上には、しばしば「民間小話」などと名付けられ、〈声〉の語り口を残した文体で綴られた「小鷹ぬい」という署名のコラムが掲載されている。小鷹ぬいは、江馬が「梅村騒動」について聞き書きをしていくなかで出会った話者の一人であった。多くの古老たちが「あの時はふんとえらい騒ぎじゃったぜ」と繰り返すばかりで、具体的なことが聞けない場合が多かったのに対して、小鷹ぬいは「騒動の情景をまるで昨日の事のようにこまごまよく記憶している」江馬は三晩続けてぬいのお話を聞きに通ったこともあった〔江馬前掲 207〕。

『ひだびと』に掲載されたぬいのコラムは、梅村騒動に関係するものというより、昔話や伝説等に関わるものが殆どであり、一見するとぬいは口承文芸の伝承者であるように見える。コラムが掲載された時には、既にぬいは1934年に91歳で亡くなった後であった。ぬいの飛驒の暮らしや維新期の動乱などについての話は、後に改めてぬいの息子・清通の妻・小鷹ふさによりまとめられている〔小鷹1971〕。小鷹ふさ自身が、高山地方の俗信などについて『ひだびと』に寄稿した書き手の一人であったが、ふさによると、ぬいは「村名主」の妻であり、その話には「女ばなれのした社会観察がゆきとどいていた」という〔小鷹前掲書13〕。明治維新の時、ぬいは25歳であった。そのなまなましい記憶を語る声は、まさに江馬修により掘り起こされた維新前後以降の飛驒の生活を語る声であったといえる。それは、かならずしも「民間伝承」の話者として発見されたわけではなかったのである。

さらに江馬は、本格的に飛驒に移住して後、「何よりもまず自分の立っている地盤の現実を直視」し、「郷土を新しく見直すことから自分の仕事を始めよう」と考え、「周辺の村々をたずね、百姓たちと語り合って、農民生活の実体に触れるよう努めた」〔江馬前掲 212〕。その延長上に、江馬の考古学への関心も含め『ひだびと』の構想があったのである。

『ひだびと』誌上で江馬が書き始めたのは、赤木清の筆名による考古学論文の他に、梅村騒動を題材にした後の長編小説『山の民』に結実する、本名で連載した「飛驒の維新」〔第3(1935)年第1号～第3年11号〕、「梅村速見」〔第4(1936)年第1～3号、第4年4～8号、第4年10～12号〕であった。

小説家・岩倉正治は、『山の民』について、「精密な研究調査をおもわせると共にケレンのない気品と信用性」を備えた、「小説というよりはむしろ物語飛驒史」であると評した〔岩倉「『山の民』を讀みて」『ひだびと』第8(1940)年第5号〕。そして特に、作品各所にあらわれる「文語体語法」について、「作者が思わず歴史的資料に牽引され、或は文学創作を離れて歴史的叙述の方に気を昂らした」のではないかと問い、「作者がこの大作に取りかかる最初の関心と深い関係をもつものに相違ない」と指摘する〔同前〕。

『山の民』は小説を標榜しているが、江馬にとっては、文献資料と小鷹ぬいの〈声〉のような古老の伝承資料などを等価値で扱っていくための新たな歴史叙述の一つの試みであったと見ることができらる。

そしてこの作品に小説というスタイルを越えた「問い」を発見し共感していたのは、当時、渋沢敬三のアチック・ミュージアムに関わり民俗学の研究を始めていた宮本常一であった。

（略）描かれたのは飛騨維新の情景であるが、そこに盛られたる農民生活向上の問題は、今も尚共通の問題として考えねばならぬ。飢餓線の上にさまようという事は農民として決して栄誉な事ではない。この問題を尚今に持ち越して居る。しかもその解決はそれぞれの状況にあった方法によらねばならない事をもこの書は暗示している。細やかなる制度慣習の描写によって…。[宮本「農民文芸の展開 一民俗学徒として」『ひだびと』第6（1938年）年第12号]

江馬はその後、生涯にわたり何度もこの『山の民』を改稿し続ける。芳賀登はそうした江馬を「ひだびと」の延長で生き続けた姿と位置づけ、飛騨の近代の始まりを、庶民の側から描こうとした『山の民』を貫く姿勢は、「飛騨の近代化」そのものを問う射程を有していたと評価する[芳賀 1991: 31-38]。

それは、江馬が編集した雑誌『ひだびと』を貫く態度でもあったはずである。

3. もう一つの「人文知」のかたちへ

「一国民俗学」史のなかで、1930年前後は、柳田國男と民間伝承の会を中心に、全国の郷土研究の団体が、組織化されていった時期として語られる。

民間伝承の会そのものも、アカデミックシステムの外側で展開していた運動であったが、しかしさらにその向こう側に、柳田と民間伝承の会に組織化されたものと単純に括ることができない、ローカルな現場に根差したそれぞれの運動があった。ここで言及したのは小倉と飛騨の実践である。そうしたローカルな実践のリテラシーによる歴史や考古学そして文学などにわたる運動の広がりの中に、柳田たちの運動が着地する場所が初めて存在しえたのである。

「一国民俗学」史のなかでは、『ひだびと』の名前は出てくるが、その豊かな広場が飛騨というローカルな場でどのようにして可能であったのかは問われない。しかしそのローカルな実践の現場から見れば、柳田國男も、活用しうる資源の一つにすぎない。民俗学という運動の歴史的可能性を、こうしたローカルな実践の領域横断的な広がりの中で検討する必要があるのではないだろうか。そこでは、選択肢の一つとしての柳田國男や「民間伝承の会」が、ローカルな実践にいかに埋め込まれていたかが問われなければならないだろう。

ローカルな現場を橋頭堡にした多様な運動が、代替不可能なローカリティを具体化しながら、自分達の暮らしと歴史を問い、また文芸を通して自らの言葉と表現を追求したのである。さら

には大政翼賛会に呼応した飛騨文化連盟のなかの江馬修と「ひだびと」という場がそうであったように、演劇の実践などとも滲みあいながら、複雑な根をはっていたのである。

その意味では、このローカルな実践のリテラシーによる運動を、民俗学史というより、近代化の過程で、アカデミックシステムとは異なるかたちで、ローカルに展開したもう一つの「人文知」の実践として問い直すことも可能だろう。

ただし言うっておかねばならないのは、ローカルな文化運動の可能性といっても、学の中央集権に対抗して郷土研究の復権を企てようというのではない。ローカルな実践が、どのような物理的な仕組みやつながりの横断性により具体化されたのか、そのかたちのなかに今後の将来においても一つの可能性となりうる学の態度（方法）と技（作法）を読み取り、一国民俗学史を相対化し、新たに民俗学の筋道を見とおす作業の一つにしたいのである。

民俗学は、否応なくそれぞれの民俗学が生み出された近代（modernity）に拘束されている。ローカルな実践のリテラシーによる運動も、そうした近代が刻まれた歴史的産物に他ならない。東アジアのそれぞれの民俗学の輪郭が、何らかの運動のなかで自覚されたとするなら、それぞれの近代に規定された運動の「かたち」を問うことから、初発の民俗学的想像力のあり方と現場を問い直し、そこから東アジアの民俗学の「かたち」を構想することも夢ではないかもしれない。

付 記

本稿の調査の一部は、2007年度～2009年度科学研究費補助金（基盤研究B）「戦後民俗学の展開に関するドイツと日本の比較研究：社会における学問実践の形」研究代表者・森明子氏（国立民族学博物館）により実施した。そして高山での調査にあたっては、『ひだびと』の志を受け継ぎ大原騒動を中心とした歴史そして民俗にいたるまで幅広い研究を展開している林格男氏にお世話になった。記して感謝します。

さて、本稿はいささか古い。2013年11月9日に京都大学で実施された「国際シンポジウム 東アジアの民俗学 —— 歴史と課題 ——」の同タイトルの予稿集にワーキングペーパーとして掲載した。その後、『ひだびと』という場をめぐり、そこで具体化された関係性のかたちや、「ひだびと」と高山を中心とした他のローカルな実践との関係について、もっと掘り下げ議論を深めるつもりであったが、それを果たせぬまま、このテーマから離れてしまい、時間がたってしまった。今回、菊地暁氏から、再掲を打診され、資料やノートをもとに改稿を試みたが果たせず、誤字脱字等、若干の字句の訂正程度で旧稿を掲載することになった。

本稿で論じた、民俗学の学史を、柳田國男を中心にすえた視点で語るのではなく、各地のローカルな多様な知の実践の広がりから、選択肢の一つとして民俗学を捉えるべきであるという考え方は、現在でも変わらない。また、本稿のなかで使った「実践のリテラシー」

というコンセプトが、その後に公表した「口承」や「聞き書き」に焦点化した民俗学の学史研究〔重信 2012〕〔重信 2015〕と本稿とを接続しうるだろうと考えている。

文 献（『ひだびと』からの引用・言及は、本文中に書誌を記した）

- 江馬修 1989 『近代作家研究叢書 65 一作家の歩み』日本図書センター（←理論社 1975）
- 北河賢三編 2000 『資料集 総力戦と文化 第1巻 大政翼賛会文化部和翼賛文化運動』大月書店
- 県立斐太高等学校創立百十周年記念事業実行委員会（斐太高） 1995 『創立百十周年記念誌 巴陵群像』岐阜県立斐太高等学校
- 小池淳一編 2009 『歴博フォーラム 民俗学的想像力』せりか書房
- 小鷹ふさ 1971 『飛騨のかたりべ ぬい女物語』洛樹出版社
- 佐藤健二 2009 「方法としての民俗学／運動としての民俗学／構想力としての民俗学」〔小池編 2009 所収〕
- 重信幸彦 2009 「「野」の学のかたち——昭和初期・小倉郷土会の実践から」〔小池編 2009 所収〕
- 重信幸彦 2012 「「声」のマテリアル——方法としての「世間話」・柳田國男から現代へ」『日本民俗学』270
- 重信幸彦 2015 「民俗学のなかの「世間／話」——『明治大正史世相篇』（1931）」『日本民俗学』281
- 高山市編 1981 『高山市史 下巻』高山印刷
- 田中彰 1992 『飛騨高山 明治・大正・昭和史』飛騨高山天領三百周年記念事業推進協議会
- 芳賀登 1983 「祭と一揆 近世高山文化の社会的性格」『芳賀登著作選集 3 知識人社会の形成』雄山閣 2012 所収
- 芳賀登 1991 「第一章 山国地域史研究の一視覚」〔芳賀編 1991 所収〕
- 芳賀登編 1991 『山の民の民俗と文化 飛騨を中心に見た山国の変貌』雄山閣出版

要 旨

日本の民俗学史は、しばしば柳田國男とその弟子たちの動向を中心に、各地のローカルな私的研究団体が、そこに組織化され、最終的に私的な研究組織から大学のアカデミックシステムのなかの学問になっていくという進化論的な物語として語られる。そこではローカルな実践は、あくまでも中央の組織の傘下に組み込まれていく対象として位置づけられることになる。本稿は、一九三〇年代半ばから一九四〇年代半ばにかけて岐阜県高山市を中心に雑誌『ひだびと』を刊行し活動していた飛騨考古土俗学会をとりあげ、同会をけん引した江馬修の日本全体のなかで飛騨の歴史を捉えるという考え方、同会が飛騨地方を拠点とした短詩形文学、歴史、考古など多様な実践の結節点であったこと、一方同会機関誌『ひだびと』が、各地の郷土研究者や、考古学や民俗学、文学など中央の研究者が投稿する「広場」として機能していたことなどに着目し、ローカルな総合的「人文」知の実践の広がりのおかげで民俗学を捉える筋道を示す。

キーワード：郷土研究、民俗学、広場としての雑誌、『ひだびと』、柳田国男、江馬修

Abstract

In this paper we discuss the beginning of Japanese folkloristics in the local settings. We are apt to talk about the history of Japanese folkloristics from the view of Kunio Yanagita who was a leader of the early Japanese folkloristics. This historical narrative has a tendency to show evolutionary trajectory from local private circles to the institute of the universities.

In this narratives the local practices are only expected the role of parts organized into the central movement around Kunio Ynagita. But the local cultural practices had each purpose and plan to cope with their own urgent problems. The early central movement around Kunio Ynagita was only one of the choices that were useful for local cultural practices. We argue the possibility of folkloristics in the context of early local cultural practices which found extensive interest in the various activities as well as folkloristics.

In this paper we explore the specific details of the Hida Archeology-Folklore Association (*Hida Kouko Dozoku Gakkai*) which was established in 1935 in Takayma city, Gifu prefecture. At that time in Takayama many kinds of cultural circles were active. Examples follow, local history, archeology, folkloristics, *tanka* (poem of 31 syllables), *haiku* (poem of 17 syllables), mountaineering, theatrical activities and so on. The members of the Hida Archeology-Folklore Association took part in other cultural circles. So various cultural activities overlapped with each other in one person. And we can grasp the possibility of folkloristics in the context of local humanities consisted of various cultural practices.

Keywords: practice of local studies, folkloristics, bulletin as a forum, *Hidabito*, Kunio Yanagita, Nakashi Ema